

## 住吉大社境内の石燈籠

|     |   |
|-----|---|
| 著者  | 黒田 一充   |
| 雑誌名 | 阡陵：関西大学博物館彙報  |
| 巻   | 76  |
| ページ | 2-3   |
| 発行年 | 2018-03-31  |
| URL | <a href="http://hdl.handle.net/10112/00023797">http://hdl.handle.net/10112/00023797</a> |

# 住吉大社境内の石燈籠

黒田 一 充

神社や寺院の境内を歩くと、石燈籠を目にすることが多い。石面には文字が刻まれているが、目にした人がわざわざ立ち止まって文字を読むことは、ほとんどないのではないだろうか。

大阪市住吉区の住吉大社は、海に面して社殿が建てられているため西側が正面になり、国道に面して石燈籠が立ち並んでいる [写真1]。

寛永21年(1644)が現存する最古の石燈籠のため、それほど古さはない。しかし、同社の石燈籠が興味深いのは、その銘文に刻まれた文字の情報である。

住吉神は海の神としての信仰があつく、古代の遣唐使派遣の際にもその安全を祈った。次第に和歌の神、文学の神としての信仰も集めたが、江戸時代になって海上交通路が



写真1 境内正面側の石燈籠

整備され、船で物資を運ぶことが盛んになると、さまざまな業種仲間や全国各地の取引先の商人、船主などが、航海の安全を祈って共同で住吉社に石燈籠を寄進するようになる。

そのため、石燈籠の石面に刻まれた年代、地名、商人名などを分析すると、当時繁昌していた業種や、どこの土地の商人と取引していたのかがわかってくる。

個別の紹介はこれまでもあるが、全体の調査は平成になってからは初めてのことであり、住吉大社の境内と周辺参道の636基、境外末社の港住吉神社(大阪市港区)と宿院頓宮(堺市堺区)の計22基を確認して、銘文の解析を進めている(数は、2017年12月現在)。

造立年代がわかるものから、鉄道網の発達で物資の輸送が船から切り替わっていく明治末までの539基を抜き出して分析してみたい。

石燈籠の奉納数を年号別に一覧表にしたのが表1の青色の棒グラフだが、享保年間(1716～

36)が一番多く、寛政・天保年間にも山があり、ついで明治が多いことがわかる。

高さは、簡易測量のため正確さに欠けるが、8メートル前後のものが6基ある。ただし、これらは最初から高く造られたものではなく、後になって石壇が追加されている。これが住吉大社の石燈籠の特徴でもある。

石燈籠というと造立当時のまま現在も残っていると思いがちだが、住吉の場合は海浜に近く、年月がたつと次第に風化して、倒壊の危険性が出てくる。そのたびに最初に寄進した業種仲間の後継者たちが修繕や再建の費用を工面し、その記念に燈籠の基壇を追加して名前を刻んでいたのである。

写真2は、そのひとつの宝暦12年(1762)に大坂・京都・江戸の<sup>かんぶつ</sup>商人が住吉講を組織して寄進した石燈籠で、反橋を渡った左右にある。甃物はおもちゃのことで、これまで5回改修や再建が繰り返され、基壇が増えて高くなっている。一番下の基壇は平成3年(1991)の改修時のもので、大阪の玩具商が中心となったが、大阪に支店を持つ有名企業も名を連ねている。

表1のオレンジ色の棒グラフは、基壇に刻まれた修繕・再建年代を加えてみた。文化年間の新規は少ないが、一方で修繕が増えてきている。文化7年(1810)に遷宮があったため、銘文に名

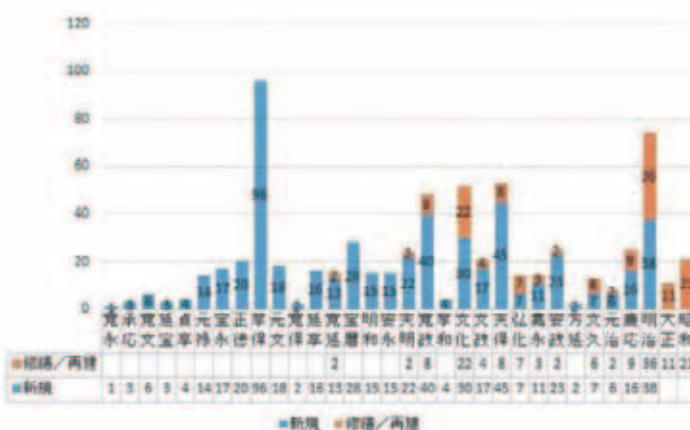


表1 年号別の奉納数と修繕・再建数



写真2 畷物商寄進の石燈籠 写真3 吉文字屋寄進の石燈籠

前のある取次とよばれた神主たちが資金集めに修繕を勧めたのだろう。

基壇に銘文が残るもの以外にも、実際はもっと多くの石燈籠が修繕や再建されたようである。本宮正面の角鳥居前にある享保20年(1735)に吉文字屋が寄進した燈籠は、銘文を池大雅が書いたとされているが[写真3]、池大雅は享保8年生まれで安永5年(1776)に没したため、晩年に近い時期に再建されたと思われる。

北枚橋東側にある寛政11年(1799)北国積木綿屋中寄進の石燈籠の基壇には、銭屋喜助ほか3名の名前がある[写真4]。これは加賀金沢の船主・銭屋五兵衛配下の船頭らと一致する。ただし、彼らは天保12年(1841)ごろには船頭になっていたことがわかっており、そのころの再建だと思われる。

銘文の年代から推定すると、造立して50~60年ぐらいたつと修繕や再建の必要が生じたようで、境内に現存する石燈籠で、当初のまま残っているものは少ないのかもしれない。位置についても、昭和4~6年(1929~31)ごろの境内整備で裏側にあった石燈籠を正面側に移動しており、それ以前の位置はよくわからない。

石燈籠の寄進者を職種で分けると、船舶名・廻船・荷主などの海上輸送と河川輸送関係が半数で、海産物、農産物関係が続く。住友家のように個人で寄進したものもあるが、多くは商人仲間や取引先と共同で講をつくって資金を集めている。寄付金集めの文書も各



写真4 北国積木綿屋中寄進の石燈籠

地に残っており、設計図と寄付の目標額が記されている。

銘文の地名を国別に数えていくと、大坂・堺(摂河泉を含む)と京都が約57パーセントを占めている。この人たちが住吉社への燈籠の寄進を呼びかけ、各地の取引商人たちがそれに応じたことを意味している。北は松前から南は薩摩まで広がっており、それらを地図の上に示したのが図1である。信濃・甲斐などの内陸部が含まれないのは理解できるが、山陰地方が空白になっているのが目立つ。これは、遠隔地にいる取引先との寄進が原則のため、廻船の立寄地の商人が参加することはほとんどなかったのと、京・大坂への物資の輸送は、越前敦賀から琵琶湖へ抜けるルートが使われたことによるのかもしれない。

北陸については、加賀の銭屋のほかにも、越前河野浦の右近権左衛門、中村三郎右衛門の名前があり、今後の分析でさらに個人が特定されるようになると、空白地が埋まっていくだろう。

また、住吉大社の石燈籠と対応する形で、取引先商人たちが居住地の氏神社にも石燈籠を造った事例を、徳島市の金刀比羅神社や富山県高岡市の関野神社で確認しており、今後さらに類例が増えていくと思われる。



図1 銘文の地名からみた奉納者の居住地

本研究は、サントリー文化財団の研究助成(2015年度、2016年度)の研究成果の一部である。

文学部教授